HCニューズレター

No.26

Human Care News Letter

2025年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

育むヒューマン・ケア

日本ヒューマン・ケア心理学会第二十五回大会を開催して

日本ヒューマン・ケア心理学会　第二十五回大会 大会委員長　聖路加国際大学看護学研究科　佐居　由美

二〇二四年七月二十日(土)、晴れ渡る青空のもと、木々の緑が鮮やかな夏の日に、日本ヒューマン・ケア心理学会第二十五回学術集会をライブ配信にて開催しました。第二十五回の大会ではメインテーマを「育むヒューマン・ケア」とし、ヒューマン・ケアの実践者の育成に焦点をあて、現在社会に貢献するヒューマン・ケア人材の育成の今とこれからを皆さんと考える場としたく企画いたしました。

ライブ配信日には、基調講演として、ユング心理学系の臨床家である岩宮恵子先生(島根大学教授)に「ヒューマン・ケアにおける専門家養成の光と影」をテーマに、ご講演をいただきました。岩宮先生は、ヒューマン・ケアの場のリアリティを多彩な事例を用いてご説明くださいました。シンポジウム①「ヒューマン・ケアを育てる教育」、ワークショップ「Z世代の人材育成　看護学導入期における特徴と教育上の工夫」では、様々な場でのヒューマン・ケア人材育成の実践報告や話題提供がされ、ウェブ参加してくださっている皆様との活発な意見交換がされました。シンポジウム②「アスベスト被害者の心を支える多職種ヒューマン・ケア」では、被害者支援団体など多様なお立場の方々によるアスベスト被害者支援についてご紹介いただき、ヒューマン・ケアにおける多職種連携における課題について議論がありました。ライブ配信日には、のべ約四百名の方のご参加をいただきました。



聖路加国際大学

本学術集会ではライブ配信に加え、二〇二四年七月十六日(火)から八月九日(金)の期間に、オンデマンド配信を行いました。聖路加国際大学の学長の堀内成子先生による特別講演「ケア提供者によるDisrespect & Abuseの予防と改善のために」、会長講演「看護における安楽なケア：ヒューマン・ケアの根幹にあるもの」、自主企画シンポジウム「対人援助の現場で活用できる臨床心理学的技法のアラカルト」、一般演題は開催期間中、いつでも視聴可能といたしました。八月九日のオンデマンド配信終了までに、一七三名の参加登録をいただきました。一般演題は二十三件の登録があり、心理、看護などの様々な分野での研究や実践の成果が発表されました。どの演題もヒューマン・ケアに資する、興味深い内容であり、今後の発展が期待されました。優秀演題の表彰を本大会でも行い、一般部門「潰瘍性大腸炎患者が日常で知覚する困り事とその対処法に関する探索的検討―中間報告―」(埼玉学園大学人間学部心理学科・大学院心理学研究科羽鳥健司氏)、若手部門「労働者の休憩時間がストレスおよび感情に及ぼす影響」(東北大学大学院教育学研究科　小林冴氏)の二件が選ばれております。

日本ヒューマン・ケア心理学会の創立記念集会は、一九九三年に岡堂哲雄先生を学術集会長に、名誉会員の木村登紀子先生を準備委員長に聖路加看護大学(現、聖路加国際大学)にて開催され、第十五回は本学の堀内成子学長が学術集会長を担当されました。このたび、第二十五回を担当することになりました際には、身にあまる光栄に身が震えておりましたが、様々な皆様のご協力をいただき、第二十五回学術集会を終えることができました。学術集会開催をお支えいただきました、すべての皆様に心より感謝申し上げます。

第二十六回学術集会は、龍谷大学の小正浩徳先生がご担当されます。来年の夏に再び、学術の場にて、皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

●基調講演

「ヒューマン・ケアにおける専門家養成の光と影」

講師　島根大学人間科学部　教授　岩宮　恵子先生

基調講演として、島根大学人間科学部の岩宮恵子先生をお迎えし、『ヒューマン・ケアにおける専門家養成の光と影』と題したご講演を

Ｚｏｏｍによるオンライン形式で開催しました。この演題は、ユング派の分析家であるグッゲンビュール・クレイグの著書『心理療法の光と影』をふまえたものでした。本学会の参加者には看護や心理などヒューマン・ケア分野の教育に携わる方々が多く、非常に関心を集めた講演になったのではないでしょうか。

講演では、援助職に就く人々が自身の心の中に「援助を求める自分」を抱えており、それを救おうとする無意識の動機が働く場合があることが指摘されました。また、養成のプロセスにおいて、「ケアをする側」（光の側面）としての自分だけでなく、「ケアされる側」（影の側面）としての自分が浮き彫りになることもあると岩宮先生からはお話がありました。この「影」の存在に自覚的であることが、援助職に携わる者が自らのこころの健康を保つために重要であると岩宮先生は強調されました。

さらに、今の学生たちは共同体意識が希薄な時代で育ってきた世代であるということも強調されました。そのため、今の学生に接する際には、失敗を恐れさせるのではなく、リカバリーを学べる環境を提供することが重要であるとのご指摘もありました。「頼ってよかった」という体験を積ませること、そして「説得や正しさよりも納得が大事」といった学生の側に視点を置いた教育的関わりの大切さについても触れられました。



私自身はこの講演の司会者でもありましたが、参加を通じて学生への接し方や援助者像を見直す機会をいただきました。中堅世代として、また心理職の養成に携わる立場として、自分自身の「影」への自覚が時に薄らぐ瞬間があることを反省するとともに、学生・大学院生への関わりに多くの示唆を得たと感じております。

最後に、岩宮先生が締めくくりに述べられた「一緒に頑張っていきましょう」という言葉は、参加者にとって励ましとなり、新たな気づきや勇気を与えてくれたのではないでしょうか。貴重なお話を通じて、私たちに勇気と、自身が担う専門性の「影」と自らの「影」に向き合うきっかけをくださった岩宮恵子先生に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

（神戸女学院大学心理学部　西嶋 雅樹）

●特別講演

「ケア提供者による Disrespect & Abuseの 予防と改善のために」

講師　聖路加国際大学　学長　堀内 成子先生

聖路加国際大学学長、堀内成子先生より「ケア提供者による Disrespect & Abuse の予防と改善のために」のご講演を頂きました。「Disrespect & Abuse（軽蔑と虐待）」、それもケア提供者によるものと聞くと、対人援助職である我々はビクッと気構えてしまいます。軽蔑も虐待も非常に厳しい言葉です。自分の周りには関係がない、そのように感じ取る方もいると思います。しかし、どの国にも非常に身近に存在することなのだと本講演で気づくことができました。

印象に残ったことが二つあります。一つ目にタンザニアおよびグアテマラを中心とした施設分娩中の軽蔑と虐待の実際です。スライドには多くの写真を掲載くださり、イメージを持つことができました。その中でも目に留まった写真が鉄製の分娩台にビニールが敷かれ、その上に一枚の布を纏った産婦が横たわる写真でした。周りには助産師も看護師も家族もいません。一人冷たく硬い分娩台の上で陣痛に耐えているのです。人の温もりがあったらと目を覆いたくなる写真でした。軽蔑と虐待には叩くといった身体的虐待だけでなく、言動的虐待、強制的な避妊手術など同意のない処置、無麻酔での会陰縫合といった想像するにも耐えがたい行為等、本来ならば尊重されたケアを受ける女性の権利をも侵害する行為があることを知りました。その背景には何があるのかを調査し、女性を尊重するケアを促進するため、国民性に合った方法で現地の方と共に考えていく堀内先生や院生の研究活動に非常に感銘を受けました。

二つ目に、日本でのケアを振り返ることです。堀内先生は「日本では軽蔑と虐待に該当することはないか」と我々に問いました。申し送りで患者の悪口を言っていなかったか、こちらの言うことを聞いてくれない患者に他の患者と差別的なケアをしなかったか、そのようなことがあった際、相手の背景にあるものを分かろうとしたか、様々なことが頭をよぎりました。一度立ち止まって日常のケアを振り返り、患者との関わりで一人ひとりが一つ一つの言動や行動の中で軽蔑と虐待に当てはまるものではないかと認知することが重要なのではないかと感じました。そしてなぜ起こっているのかを周りと共有する、そのことにより変わるきっかけが生み出されるのかもしれません。偏見や差別に左右されているかもしれない、業務が忙しく相手の声を聞こうとしなかったかもしれない、振り返り考えることが予防と改善に繋がることなのだと感じました。


堀内 成子先生

先生のお言葉「人は愛のある心のこもったケアを受けることが生きる上で重要。」ケア提供者として日々胸に刻んでいこうと思います。貴重な内容のご講演に心より感謝申し上げます。

（帝京大学助産学専攻科　東原亜希子）

●会長講演

「看護における安楽なケア：ヒューマン・ケアの根幹にあるもの」

講師　聖路加国際大学大学院 看護学研究科　教授　佐居 由美先生

第二十五回大会長の佐居由美先生より、「看護における安楽なケア：ヒューマン・ケアの根幹にあるもの」というテーマでご講演いただきました。佐居先生は、聖路加国際大学大学院看護学研究科の基礎看護・看護技術学教授でいらっしゃり、長年にわたって看護基礎教育にご尽力されています。全ての看護ケアは安全で安楽なものであるべきというお考えのもと、「安楽」な看護ケアについてご研究されており、安楽の概念、臨床における看護実践、初学者への教授方法など、多岐に

わたり大変わかりやすいお言葉でご講演いただきました。

皆様、「安楽」という言葉は日常でお聞きになるでしょうか。「この姿勢は楽だ」という言葉は用いても「この姿勢は安楽だ」とは言わないかもしれません。一方で、看護において「安楽」は「安全」「自立」と共に看護ケアを行う際の必須条件、中心定理であると位置づけられています。佐居先生は、看護を学び始める初学者に「安楽」をどう伝えるのか、また安楽なケアを実践できる看護職者を育むためにはどう教授すべきかとお考えになり、一心にご研究に取り組まれています。

ご講演の中で、熟練看護師は「安楽」をどう捉えて実践しているのかを調査された、ご研究結果の一部をご紹介くださいました。ケアの類型は二つに分けられ、一つ目に、患者に気持ちよさを感じてほしいという思いから始まり「快を提供」すること、二つ目に、患者の苦痛を推測、または患者からの表現を捉えて「苦痛への対応」をすることと示されました。私自身も看護職に就いて十数年が経ちますが、学生の頃や新人時代から振り返ると、「安楽」という言葉は耳慣れていながら抽象的な理解のままで、日々「安全」を強く意識することがあっても、患者の苦痛を推測したり、どうすれば快を提供できるのかという視点を常にもってケアを実践できていたのかは疑問が残り、省みる契機となりました。

昨今、医療技術の発展は著しく、より高度で幅広い知識・スキルが求められるようになり、看護職の仕事も多様化しています。そのような現代であるからこそ、ご講演で佐居先生が述べられた「患者への安楽なケアは、看護職のヒューマン・ケアの根幹にあるもの」ということを全ての看護職の〝合言葉〟として、今一度、自身のケアを振り返ってみる必要があると強く感じました。

最後に、参加者に貴重な学びの機会を与えてくださいました佐居先生、ならびに本稿の執筆の機会を設けてくださいました関係者の皆様に、心より御礼を申し上げます。

（聖路加国際大学大学院　看護学研究科　西本　葵）



佐居 由美先生

●大会企画シンポジウム

「アスベスト被害者の心を支える多職種ヒューマン・ケア」

シンポジスト　伊藤 正哉先生　国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター 研修指導部部長
古川 和子氏　被害者支援団体
長松 康子先生　聖路加国際大学 大学院 看護学研究科
小野若菜子先生　東京都立大学 健康福祉学部 看護学科

司会

アスベストに起因する肺がんや中皮腫は、完治が難しい悪性疾患です。私は、十五年程前からアスベスト被害者とその家族への看護について研究調査を実施してきましたが、悪性疾患の治療や看護だけでは患者さんとご家族のケアニーズを充たすことは難しいと考えるに至りました。アスベスト被害者とその家族は、病気や症状に対する治療以上に、心のケアを必要としているからです。というのも、アスベスト被害者同士が出会う機会が少ない上、一般の人々の病気に対する理解が乏しいため、患者さんとご家族は孤独に陥りやすいのです。アスベスト被害者とその家族は、完治が難しい病気になった絶望、経済的困難、公害被害者としての苦悩などに苦しんでいます。アスベスト被害者とその家族の心の苦しみを理解し、その痛みや悩みを軽減し、共に歩む専門家や支援者が必要とされています。本シンポジウムでは、ご主人をアスベスト性肺がんで亡くされ、アスベスト被害者支援団体で患者さんとご家族の支援をしている古川和子氏が、アスベスト被害者と家族の苦悩と経済的困難の実態を語られました。伊藤正哉氏（国立精神・神経医療研究センター　認知行動療法センター研修指導部部長）は、アスベスト被害者と家族を対象に認知行動療法に関する講演を行った経験を話されました。さらに、司会者の小野若菜子氏（東京都立大学健康福祉学部看護学科）は、アスベスト被害者遺族に対するグリーフケア実践の経験から、アスベスト被害者と家族の苦しみへの理解と共感を求めました。

シンポジウムには、心理専門家、看護師、アスベスト被害者とその家族、患者支援団体関係者などが多数参加され、アスベスト被害について関心の少なかった方にも、アスベスト被害の防止と被害者への支援の重要性を知っていただく機会となりました。

（聖路加国際大学大学院　看護学研究科　長松康子）

●大会企画シンポジウム

「ヒューマン・ケアを育てる教育」

シンポジスト　島田多佳子先生　関東学院大学 看護学部 看護学科 基礎看護学
小高 恵実先生　上智大学 総合人間科学部 看護学科
千葉 早耶香氏　NPO法人 境を越えて
桃井 雅子先生　聖マリア学院大学 看護学部

司会

本シンポジウムでは「ヒューマン・ケアを育てる教育」をテーマに、島田多佳子氏より「看護理論と実践の往還～教育現場から～」と題し、校訓「人になれ　奉仕せよ」について成熟した人間のあり方としてキリストが実践したように他者に「奉仕する」人間として生きることを促すという意味をご説明いただきました。また、奉仕者として「看護対象者のニーズに応える力」を育成する上で、臨床実習で看護師が自らの実践の意味と省察を学生に語り、共に実践の意味を探求するプロセスを辿ることがヒューマン・ケアの素地を育成する教育になり得ることを、ご経験を基にご講話くださいました。

小高恵実氏は題目「キリスト教ヒューマニズムに基づく看護専門職教育」について、大学の理念「キリスト教ヒューマニズム」の「自分の才能や学びの成果を他者のために役立てることが、人間としての成長につながる」という考え方、また学生の内には看護専門教育に移行する前段階から「すでにキリスト教ヒューマニズムが根付いている」という仮説のもとで、大学の理念と看護基礎教育におけるヒューマン・ケアを関連付けて教示することで教育の深遠化を図るという、教育の展望をご説明くださいました。

千葉早耶香氏は「エイブリズムとヒューマン・ケア～ヘルスヒューマニティーズにおける看護教育～」と題し、「エイブリズム」は障がいのある人とのコミュニケーションを歪めると指摘し、これに抗う方策としてご所属施設の使命「身体がどんなに不自由でも、その人らしく地域で暮らせるしくみ作り」における活動のご紹介、また「ヘルスヒューマニティーズ（ヘル

スケアにおいて我々が遭遇し経験することの意味は芸術や人文学を通してこそ十全に理解できるという考え方」に依拠し、エイブリズムに抗い同時にヒューマン・ケアを育む看護教育の可能性をご講話いただきました。

以上より、人間が本性として有する「ケア（奉仕）の力」また本性として欲する「芸術や人文学を通して理解される生の意味」、つまり人間とその本性を探求することが「ヒューマン・ケアを育てる教育」の探求に繋がるとの示唆を頂きました。貴重なご講演を、深く感謝申し上げます。

（聖マリア学院大学　桃井雅子）

●自主企画シンポジウム

「対人援助の現場で活用できる臨床心理学的技法のアラカルト」

企画者　今井田貴裕先生　人間環境大学
　　磯和壮太朗先生　名古屋芸術大学
話題提供者　大浦　真一先生　東海学院大学
　　北川三沙代先生　岡崎市民病院
　　福井　義一先生　甲南大学
　　福島　裕人先生　同朋大学
指定討論者　大場　良子先生　埼玉県立大学
司　会　新井　雅先生　跡見学園女子大学

本自主企画シンポジウムでは、様々な対人援助職者が各臨床現場で用いることができる短期的・簡潔な介入を学ぶことができました。

大浦先生のご発表では、タッピングタッチの技法についてのご説明や具体的な活用方法を学びました。セルフケアと相互ケアが可能なタッピングタッチは、心・身体・関係性に良い影響をもたらすことが分かりました。

北川先生のご発表では、ストレスリダクションの技法について学びました。クライエントが自分の身体の緊張に自分で気付き、自らの力でその緊張を緩和していくストレスリダクションは、対人援助職のストレスマネジメント研修においても活用が可能であることが分かりました。

福井先生のご発表では、リソースタッピングについて学びました。自己に内在するリソースに焦点を当ててその感覚を増幅し、タッピングによって増幅したリソースを利用可能な形でインストールする技法であるリソースタッピングは、対人援助の現場ではセルフケアの技法として活用できることを学びました。

福島先生のご発表では、ホロニカル・アプローチの基本的な考え方を理解することで、統合的な視点が身に付き、実際に行っている支援を客観的に振り返ることが可能となることが分かりました。

大場先生の指定討論では、看護の現場での活用の可能性や課題について挙げていただきました。また、新井先生の指定討論では、教育分野での活用の効用や課題について挙げていただきました。これらの技法は分かりやすく実施しやすいものであり、看護や教育の臨床実践における適用が期待できることが分かりました。

全体を通して、対人援助の現場で活用可能な臨床心理学的技法について理解を深めることができました。クライエントだけでなく、対人援助者が自分自身で、あるいはお互いにこれらの技法を適用し、ストレスに対処していくことが大変重要であると感じました。貴重な学びの機会をいただき、ありがとうございました。

（無憂樹学園　臨床発達心理士　幼稚園教諭　大鷲栄里）

●ワークショップ

「Z世代の人材育成～看護学導入期における特徴と教育上の工夫～」

講師　神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科　加藤木真史先生
講師　兵庫大学看護学部看護学科　大橋久美子先生

本ワークショップでは「Z世代の人材育成～看護学導入期における特徴と教育上の工夫～」をテーマに、「Z世代の看護学生に対する基礎看護学の授業における工夫」と「身だしなみ教育について」の話題提供がありました。

まず加藤木真史氏から、Z世代の看護学生の特徴として、ソーシャルネイティブで多様性を重視するなどがあり、ITの目覚ましい進展や不安定な経済がその時代背景にあると伺いました。一人一人の個を捉えた教育には、世代の特徴とその背景理解が有用であると理解しました。このようなZ世代に対する授業での工夫として、個を捉えるため、学生を認める・受け止める姿勢を持つことや、新しいITツールを導入する等を行っているとの紹介があり、教員の積極的な教育上の関わりが求められると学びました。印象的だったのは、学生とともにより良い教育を作り上げていくという言葉で、教育は一方的なものではなく双方向のものであると再認識することができました。

大橋久美子氏からは、学生の身だしなみについて、ご自身の大学での取り組みの紹介がありました。人の個別性を教える看護の世界で、学生の身だしなみが同じであることの違和感から、今後の看護学生における身だしなみについて考えさせられました。看護現場での身だしなみは清潔・誠実でありたいことから、学生の身だしなみには細かい指定があります。多様性を認める現在社会において、Z世代の特徴も踏まえると本人にとって意味のある自分らしさの表現を認めることも必要であると伺いました。学生の自分らしさを尊重し、看護現場で求められる身だしなみについて考えるための様々な工夫をご紹介いただきました。Z世代を意識し日々心がけていることとして、看護学を学ぶこと、看護職を目指してくれていることに感謝するという言葉が印象的でした。

話題提供後のディスカッションでは、身だしなみ教育への発言が多くありました。学生が正しい看護技術ができるような身だしなみなら細かい指定をしなくてもよいのではないか、身だしなみが整えられているからこそ、臨地実習で中身も見てもらえるのではないか等の意見があり、大学と学生間だけでなく、臨床現場も含めて考える必要があると思いました。ワークショップ参加者全員が、教育現場に関わる一人として、看護の世界に飛び込んでくれた学生を信じて見守る姿勢を持ち続けていきたいと感じた貴重な時間だったと思います。

（聖路加国際大学　臨時助教　豊田友香）

●研修会

「働くひとの心理学～働くとは、働くことの意味、よりよい仕事との関わり～」

講師　筑波大学人間系　教授　岡田　昌毅先生

二〇二四年七月二十七日に研修会が開催されました。本研修会は「働くひとの心理学～働くとは、働くことの意味、よりよい仕事との関わり～」と題され、筑波大学人間系の岡田昌毅

教授をお招きしました。まず、研修会の冒頭で、岡田先生はご自身のご経歴をご紹介くださいました。その後、働くことに関するグループワークを実施してくださり、働くことに関する様々な概念をかみ砕いてわかりやすくご教授くださいました。

本研修会の前半では、個人向けのワークとグループワークが実施されました。最初に、個人向けのワークとして、「働くとは何か、なぜ働くのか、働く原動力とは、よりよい仕事との関わりとは」というテーマについて、自由にキーワードを書きだすことが求められました。その後、グループワークではそれぞれ記述したキーワードを共有し、分類を行っていきました。このグループワークでは、私自身が働くことについて向き合い、考え方や価値観を深く内省することで自らのキャリアを見返す大事な機会となりました。

研修会の後半では、働くことに関する様々な概念を紹介くださいました。働くこととは何か、なぜ働くのか、よりよい仕事との関わりと言う観点でご教授くださいました。心理学的概念のみならず一般的な意味から法律まで網羅されており、内容は、とても身近なものとして感じながら学ぶことができました。特に印象深かったのは、ポジティブ心理学の大家のセリグマンの「いずれの職業も任務や天職になりうる。自分に適した仕事を探すことではなく、今の仕事への自分の姿勢を見直し、仕事が自分に適していることに気づくこと」と言う言葉でした。こうした概念の教授を通して、改めて私自身のキャリアを考え直す機会を頂いたように思いました。

本研修では、自らのキャリアを見つめ直すことと働くことに関しての様々な知見に触れることで、自分自身の働き方や生き方について考え直す機会であったように思います。私自身は心理臨床家を経て大学教員となった経歴について、肯定的に見ることができなかったように思うことがありました。しかし、本研修を通して、当時は意味を見出すことができなかったとしても振り返ったときに意味を見出せることがあることに気づきました。そういった視点で自らの経歴を振り返ると、無駄な点はないのだろうと自然に感じることができました。



岡田 昌毅先生

（人間環境大学　今井田貴裕）

優秀発表賞　口演発表部門（若手）

「優秀発表賞を受賞して」

東北大学大学院 教育学研究科
総合教育科学専攻
小林 冴

この度は優秀発表賞を賜り、大変光栄に感じております。審査をはじめとして大会運営関係の皆様、調査に協力してくださった皆様、貴重なご意見・ご感想をくださった先生方、日頃から丁寧にご指導くださる安保先生をはじめとした所属コースの先生方へ心より御礼申し上げます。

私は、労働者のメンタルヘルスに関心を持ち、研究を進めております。労働者のメンタルヘルスの不調は長らく問題視されており、その要因として長時間労働が挙げられております。長時間労働を是正するために様々な「働き方改革」が考案されていますが、心身の疲労回復に必要な休息と回復の時間を確保することは依然として課題です。国内外ともに、法的に定められた休憩を控える傾向が見られる中、労働者の休憩に関する研究は近年増加しており、関心が高まってきています。海外の研究では、昼休み以外の十分程度の短い休憩が疲労を回復させ、心理的・身体的健康を改善する重要な戦略として機能することが明らかになっています。しかし、日本の労働環境は海外と異なる文化もあることから、日本の労働者の効果的な休憩を明らかにしたいと思い、調査を行いました。また、コロナ禍以降、テレワークが新しい働き方として導入されました。そこで本研究では、職業生活におけるストレスと感情に影響を与える効果的な休憩時間と回数を明らかにすることを目的とし、職場とテレワークの違いについても検討しました。結果として、休憩時間や回数とストレスは環境による変化は見られませんでしたが、感情は環境によって異なることが示唆されました。

今回の受賞を励みに、今後の研究ではより詳細な分析を行うとともに、具体的な休憩方法や職場環境の改善策を検討します。研究を通して、労働者のメンタルヘルス向上に繋げられるよう努力してまいります。

優秀発表賞　口演発表部門（一般）

「優秀発表賞を受賞して」

埼玉学園大学人間学部 心理学研究科
臨床心理カウンセリングセンター長 教授
羽鳥 健司

このほど、第二十五回学術集会優秀発表賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。ご多忙の中ご審査いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。なんと、前回に引き続いて二年連続で受賞の栄誉に浴しましたこと、幸甚の極みに存じます。果たして会長が二年連続で賞をもらうとは、何か裏があるのではないかとお勘ぐりの先生もいらっしゃるかもしれませんが、選考委員会は理事会とは完全に独立しておりますので、どうかご安心くださいませ。

さて、冗談はさておき、現在、私が取り組んでいる研究は、炎症性腸疾患（ＩＢＤ）の患者様を心理学的に支えることを目指したものです。心理学がご専門の先生方にはなかなか聞きなれない病名かと思いますが、この病気は主にクローン病（ＣＤ）と潰瘍性大腸炎（ＵＣ）の二疾患を指します。ＣＤは口から肛門まで、ＵＣは主に大腸に炎症が起こります。どちらも原因不明の慢性疾患であり、罹患すると完治することのない難病です。主な症状は、下痢、血便、発熱、腹痛、体重減少、痔瘻などです。がんに進行することもあるため、できる限り寛解期を維持することが求められます。症状を抑えて寛解を維持するためには医学的治療が最も有効ですが、良好な食習慣の維持やストレスマネジメント、病気と向き合う姿勢や治療脱落からの復帰、あるいは病気と付き合いながら如何に自己実現を目指すかなどのレジリエンスに着目した心理学的な支援も、寛解維持のみならずＱＯＬ向上にも役立ちます。

心理学的な支援研究は米国を中心に行われていますが、ＣＤとＵＣをまとめてＩＢＤとして研究されていることが多いため、私はＣＤとＵＣを分けて、より詳細な検討を行っております。今回もＣＤ患者とＵＣ患者を分けて日常生活における困難事や認知行動的対処を分類しましたところ、共通点がありつつも、やはり相違点もありました。特に、心理学的に注目される合併症の一つとして、過敏性腸症候群（ＩＢＳ）と思われる症状を四割以上の患者様が体験されており、器質的な病変のあるＣＤおよびＵＣに合併するＩＢＳへの支援は、従来のＩＢＳの治療のみでは対応が難しいのではないかという印象を抱きました。今後も、両疾患をきめ細かく支援できるように研究と実践を継続できればと考えております。

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
第26回大会・研修会のお知らせ

●２０２５年 日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第26回大会・研修会次の通り開催する予定です。
詳細は随時ＨＰに掲載いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

開催日程：２０２５年８月31日(日)～９月17日(水)
開催方法：ＷＥＢ配信　および　対面開催

テーマ：「日常生活の中のヒューマン・ケア」

・研究発表・自主シンポジウム(ＷＥＢ開催)
　期間：２０２５年９月１日～９月17日
・基調講演・教育講演(対面開催)
　開催日程：２０２５年８月31日（会場　龍谷大学　大宮キャンパス）

・基調講演
「夢記と生きる―『明恵上人夢記』の宗教世界―(仮題)」
　講師：野呂　靖(龍谷大学　心理学部)
・教育講演１
「身体からみた起立性調節障害の理解と支援(仮題)」
　講師：阪上　由子(滋賀医大　小児科学講座)
・教育講演２
「〝好きなもの〟がもたらすケアの力(仮題)」
　講師：荒井　久美子(京都教育大学　総合教育臨床センター)

今後のスケジュール
発表申込　３月末～４月末(予定)
（学術集会への事前参加申込は、３月末～７月末を予定しています）

学術集会長　小正　浩徳(龍谷大学)

・研修会テーマ
「研究者のための論文作成の秘訣」
　講師：古田　克利（立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科・教授）
・詳細はＨＰ上に掲載します。
研修委員長　大場　良子

編集委員会より

機関誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。執筆要項・編集規程は学会のホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。ご不明な点などは左記機関誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のＷｅｂサイトは、左記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文(2000-2024)のＰＤＦが学会Ｗｅｂサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には左記のＩＤとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ID:HC2025　パスワード:Ryukoku2025

（Ｗｅｂ担当　北田　雅）

編集後記

今年に入ってから十年に一度といわれる寒波が押し寄せ、昨年被災された能登地方を含め、日本海側や豪雪地帯では、大雪や落雪被害に関する報道がされています。皆様の安全と一日も早い暖かな春の訪れをお祈り申し上げます。

現在、高齢者の孤立問題が話題となっておりますが、先生方もよくご存じの通り、これは高齢者だけの問題に限りません。大学に在籍する学生においても、孤立状態から通学しない、下宿に引きこもる、そして留年に陥る。あるいは、留年から孤立状態に陥るという事態に、しばしば遭遇します。居場所づくり等、人と人とのつながりを形成するきっかけづくりをそれぞれの場所で提案できれば、将来に対して、よりよい変化を起こせるのではないかと考え、周囲の協力を得ながら取り組み始めております。

次回第二十六回学術集会は小正浩徳先生のもと、ＷＥＢ配信に加え、久しぶりに対面形式にて開催されます。多くの会員の先生方、大学院生の方々のご参加を期待しております。京都にて、学会員の皆様と対面でお目にかかることを楽しみにしております。

（広報担当　北田　雅）

学会事務局および機関誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学内
Tel & Fax: 03-5948-4478　E-mail: office@j-hc.jp

●機関誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科　安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax: 022-795-6149　E-mail: jhcs@tohoku.ac.jp